

monthly JŌDO

2011

11

November



法然上人讃仰会

京都大本山清浄華院

◆御詠歌◆

雪のうちに
仏のみ名を
唱ふれば
つもれる罪ぞ
やがて消えぬる

雪が降り積もるように、私たちの身にも日々に知って作った罪、知らずに作った罪が積もってゆきます。しかし、あるがままの姿で、身と口と心で作った罪を心から懺悔し阿弥陀さまの御名を唱えたならば、阿弥陀さまのお慈悲の光に照らされ、すべての徳が包み込まれたお名号の功德により、罪はたちどころに消えてしまうのです。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

大本山清淨華院第八十二世宣譽龍海上人
晋山式





本堂で厳修された晋山式。右手前の衣は清浄華院に伝わる九条の袈裟

平成23年9月30日（金曜日）午後1時30分より、大本山清浄華院の第82世宣譽龍海台下の晋山式が厳修された。当日はあいにくの天気となり、雨が降ったり止んだりという日和だったが、新台を下を迎える慶事に総本山知恩院の伊藤唯眞親下、各大本山の台下をはじめ、有縁の諸上人、また、新台下の所属寺院のある東京教区からも多くの上人が参集し、厳かに晋山式が始まった。

清浄華院の晋山式では、読経中に新台下が伝統の九条袈裟を被着する特別な儀式が執り行われる。浄土宗では初めて国師号を賜った清浄華院第十世等熙上人が称光天皇より下賜された袈裟をこの晋山式に合わせ復元したもので、この伝衣式は江戸時代以来で、当時の式を忠実に再現したものとなった。ちなみに当初の袈裟は室町時代のもので生地が輸入品という貴重なもの。その衣をご幼少の頃から足に障がいを持たれている新台くだが、役僧の手を借りながらも毅然とした所作で被着された。法要の最後の挨拶では、清浄華院との縁の話に触れながら、新台下としての抱負を語られた。また、晋山式後には京都ホテルオークラに場所を移しての晋山祝賀会が催され、こちらにも親下台下がご臨席、お祝いの宴が進められた。

伝衣式の復活などは前台下であった伊藤親下時代の方針である伝統の復興の一環だが、格式と伝統あるこの清浄華院が、親下とも親交のある真野新台下によってさらに興隆することを祈らずにおれない。



真野龍海台下 まの りゅうかい

大正11年3月滋賀県生まれ。昭和19年大正大学仏教学部卒業。数か寺の浄土宗寺院で研鑽を積んだ後、東京教区芝組天光院真野正順の弟子となる。昭和38年より同寺の住職を務めるかたわら、大正大学で梵文学を教える。同大学学長、芝学園理事長などのほか、浄土宗内での役職、大本山増上寺での役職を歴任し勤学となる。また自坊では幼稚園の経営、そして趣味を活かした天光院展やコーラスなど数多くの事業や行事を行ってきた。平成7年には勲四等旭日章受章。

雨天となったが開扉式も滞りなく厳修された



清浄華院ならではの九条袈裟の被着が行われた



知恩院門跡をはじめ大本山の法主が一堂に会した



晋山式の最後に新台から十念が授けられた

晋山式が厳修された本堂前での記念撮影



京都ホテルオークラでの祝賀会で御礼を述べる
真野新台下

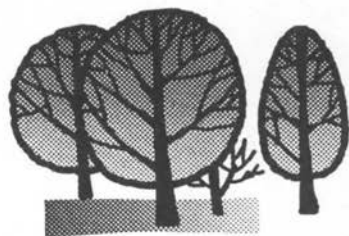
浄土

2011/11月号 目次

カラーグラビア 大本山清浄華院晋山式	撮影=小堀祐二	1
巻頭特別寄稿	真野龍海台下	6
いのちの無常と来世への希望③	梶村 昇	8
法然上人を歩く	高橋良和	19
江戸を歩く	森 清鑑	22
会いたい人 白井晃さん①	関 容子	28
響流十方	小村正孝	36
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	40
誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	51
編集後記		52

表紙裏・法然上人を歩く+表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く京都大本山清浄華院



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

ポリオの私を救ってくれた 清浄華院傍の「大学病院」のこと

浄土宗大本山清浄華院

法主 真野龍海

このたび、思いもかけず浄土宗七大本山の一つである京都の大本山清浄華院しやうじやうけいんの法主にご推薦をいただきました。老僧のこととて思案にありましたが、ご推薦の方々の意を拝し有り難く御請けすることと致しました。

さて、清浄華院に居住してあることを思い出しました。それは、三つくらいの幼児の頃のことです。私が生まれたのは、滋賀県の八日市の近くで、「川合寺かわいであら」という地名でした。前は小川がのんびりと流れ、寺側には柿の木があつて、熟柿となると適当に落果、母は砂をとりのぞいて食べさせてくれました。ある時、幼児の私はその小川に真綿の着物のまま、ぶかぶかと流されて下流のおばさんに助けられたそうです。真綿の浮力のおかげで鼻先だけこすつて助かったのです。先日も近くの和尚さんからその川はよく落ちる川と聞き、よくも助かったものだと思をなでおろしたことでした。

ところで、私にはこの清浄華院についてみなさまに聞いていただきたいことがあります。それは母から何度も聞かされて心底に刻み込まれている思い出です。



私は元気な子だったようで、まだ幼児なのに近くの太郎坊山に一人で登山したまでではよかったのですが、翌朝起床も出来ず、ぼったり倒れてしまいました。おどろいた母は、早速私をつれて京都の大病院に行き、治療を受けることになりました。はつきりしませんが、滋賀県に近い京都の大病院となると、今、住職晋山を下命された清浄華院の東に位置する京都府立病院が、どうもその病院であろうと思われます。カルテ保存も五年ということですし、確認のしようもなくあれこれ思いはしますが、因縁の赴くところ、御仏の御縁というか、他の病院も思いつかぬままに「そうだ！この清浄華院直近の病院で治療を受けたのだ。」と信ずることに致しました。雪の近江のたんぼ道を転びまろびつ、私を背負って通院してくれた今は亡き母も異議はないことでしょうし、清浄華院晋山を喜んでくれていると思っています。

たいへん強引な思い出話で恐縮ですが、私の難病もある程度まで治りました。というのは、縁あって三才頃、京都府宮津市の大頂寺に転居することになりました。転居間もなく、徒歩二十分位の宮津町立幼稚園に独りで通い、卒園後は隣接する宮津小学校に元気に通学しました。この間の私には、全く脚が不自由だという意識もなく、積雪時にも元気に飛び回って、通園、通学した記憶しか残っていません。しかも小学校五年位には、五、六km以上離れた舞鶴の軍港まで遠足もしておりとても元気でした。

その後、津中学、佛教専門学校（現佛教大学）、大正大学へと進みますが、この十二年間はおかげさまで皆出席でした。その御恩を今回、特に上記のように受け止めて、このたびの清浄華院の仏縁を有り難く衷心より感謝している次第です。

いのちの
無常と
来世への
希望

3

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人鑽仰会
公開講演会

概録

そこで山の越え方です。その山をどうすれば越えられるかということです。そこで、昔からいろいろな人が出て、いろいろなことを教えてくださっています。

一つは、念仏です。もう一つは坐禪です。

念仏というのはご承知のとおり、法然上人が、日本で教えられたのですけれども、法然上人の前でも比叡山で教えられていました。

比叡山では何を教えていたかというところ、まず、「戒律」を守れということです。戒律というのは、最低五つの戒律があります。五戒。その上に、いくつも戒律が積み重なって、二百戒なんていう戒律もあります。

それから、「定」^{じよう}です。心一つに定める。ピタッと心を定めなさいということです。ミャンマーなどに行きますと、仏教国ですから市中に仏教の会場がたくさんありまして、そこへ行きますと、みんな瞑想をして心を静めております。あれが定です。

三番目が「慧」^えです。学問をして、真理を知れということです。戒・定・慧という三つ、これを修め、守って、そして悟りを開けというのが、比叡山の教えなのです。

戒律一つ取ってごらんなさい。生き物を殺すというのが一番最初です。

しかし、どう考えたって、私たちは生き物を殺す、自分では殺さなくたって、人の殺したものを食べて生きています。う。。「いや、俺は穀物しか食べない」と言ったら、穀物だって生きています。魚はもちろんでしょう。

人間はそういう、人間以外のものの命を奪って生きています。それが人間なのです。それではお釈迦様はなぜ、命を殺すなど言ったのでしょうか。これが私は論理だと思うのです。

いいですか、お釈迦様は生きものを愛しめと言われた。生きものを愛しめということは、生きものを殺すなんてことはもちろんできない。そうすると、この生きものは殺していいとは言えないわけです。生きものを殺すなど言えば、どんどんその方向へ進む、そうしたら、生きものは一切殺してはならないことになる。しかし、それを殺して生きているのが人間だとすれば、それは守れないことでしょう。

定だってそうです。心を一緒に定めよと言ったって、法然上人がおっしゃっている。「私の心はじつとして定めていても、心は猿のごとく、あっち行ったり、こっち行ったり飛んで歩いている」と、こう法然上人はおっしゃっています。定まらないのです。

今晚寝るときに、布団の上で五分間ぐらい坐禅してごらんなさい。ろくなことを考えないで、本当にそういうときに限って、くだらんことを考える。心なんて定まらないです。

だから、戒を守ることでもできません。定もできません。慧というのは智慧のこと、法然上人は智慧の塊のような人です。「智慧第一の法然房」と言われたぐらいですから、その法然上人が、「私の智慧ではとても真理はつかめない」と言っておられます。

そうすると、比叡山で戒・定・慧、これを三学と申しますが、戒定慧の三学を守れと言っているのに、それはできないと法然上人は言われた。そして、自分のような者が救われる道はないかと、それを仏教の中に求めた。

それは無理ですよ。なぜかという、仏教というのは、戒定慧を守れという学問です。その中で、守れないものが救われる道はないかというのですから、大体求めること自体が無理なのです。

しかし、それを二十五年、十五歳から四十三歳まで、求め求めて、ついに阿弥陀様が南

無阿弥陀仏と申せば、申した者を全部救い摂る。自分の国、浄土にです。極楽浄土にです。自分の国に救い摂る。だから、まず極楽浄土に行つて、そしてそこで修行をして仏になれると言っている。

山の越え方

だから、法然上人の教えは二段階です。まず極楽浄土に往生する、往つて生まれること。そしてその次に、極楽浄土で成仏する、仏になるという二段階です。というのが、念仏なのです。これは一つの山の越え方なのです。

それから、榮西禪師や道元禪師は、坐禅ということを言われた。日蓮上人はお題目を唱えるということを言われた。いろいろな形で、山の越え方を言われた。

ですから、我々は自分の体、自分の生き方、そういうものに合った道を選べばいいのです。坐禅を選ばない人は坐禅。去年この講演会でお話しされた何とかさんは、坐禅をずつと若いときにやっていらつしやうった方の方です。そして、坐禅をやったら悟れなかったというのです。痔になつちやうたつておつしやうていた。(笑)

というのが、本誌『浄土』に載っています。私はそのお話を拝聴しませんでした、あとで読んで笑つてしまいました。

臨済禅ですが、それで、その人は念仏に入つたのです。だから、どうぞご自由に選んでください。

僕はこの言葉が好きなのですが、法然上人も、「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土

へまいりなん。とてもかくても此の身には、思いわずらう事ぞなきと思いいぬれば、死生しじうともにわずらいなし」と言われております。

「生ければ念仏の功つもり」、生きている間は念仏をし、念仏の功つもりなんていうから、念仏を積み重ねてたくさんやって、このぐらいたまったというような、ポイントカードみたいなような。(笑)

そうじゃないですよ。功つもりというのは、そんな貯金をするようなものではない。

本当に、南無阿弥陀仏というのは、こんなことを言っては南無阿弥陀仏に申しわけないが、腹が立って、腹が立ってしょうがないときに、南無阿弥陀仏を言ってごらんなさい。何となく治まるのです。本当にそうです。

南無阿弥陀仏の効用というのは、本当に煩惱の炎が燃えた、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、木魚がなければ手で、指先でいいの。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と。こうやったら、そうすると、本当に心が治まるのです。

大体人間は少しやかましく言い過ぎている。放っておけばよいのです。何でもうるさいこと言ったら、放つときましよう、大抵それで済んでしまうのですよ。

それに頭を突っ込んで、ガーガー、ガーガー一緒にやってやるものだから、だんだん、だんだん問題が大きくなる。

もうわかったから、放つとけ。放っておくと、そうすると大抵問題が済むのです。それ以上済まないものはあるでしょうけれども、それは仕方がないです。

だから、生きている間は念仏の功、念仏を申して生きるのです。念仏を申しながら生きる。そして死んだら浄土へ行く。これは法然上人は「浄土に行こう。死んだら浄土へ行く

のだ」とこういうふうに思つて、「とてもかくても此の身には」、もうともかくこの身には、「思いわずらう事ぞなきと思ひぬれば」、僕はこれが好きなんです。思いわずらうことはいんですよ。淡々と。

もう、絶対にこの教えでなければならぬのだというふうに思わないでほしいのです。思わなくていいのではないかと思うのです。人の宗教の悪口を言うわけじゃないのですが、例えば、カトリックなんかで公教要理というのがあります。公教要理というのは、カトリックではこれについてはこう、これについてはこうだということを全部箇条書きでピチッと書いてあるのです。それが公教要理です。

それに違^{ちが}うと、「それは間違^{まちが}つてゐる。それは異安心^{いあんじん}だ」というのです。余りにも人の心を決められると、楽なものではありません。自分で決めなければならないということは辛いことです。このとおり歩めという、楽なのです。

昔、学生が僕に言いました。「先生のころはよかったですね」と。「ばか言うな、戦争中で何がよかったか」と言ったら、行く先が決まっていたということです。今の私たちは、自分で行く先を決めなければならない。これは辛いですよと言ったので、なるほどなど、僕は思いました。

だから、行く先を決めてくれると楽です。だけど自分の思つてゐるところ、そこへ行けばいいのではないのでしょうか。だから、大きく、念仏なら念仏という世界の中に包まれて、そして自分の思う道を進んでいいのです。

「とてもかくても此の身には、思いわずらう事ぞなきと思ひぬれば、死生ともにわずらいなし」。だから、私は一人一人違つてもいいと思うのです。

熊谷次郎直実、これは浄土宗では有名な念仏の信者ですが、熊谷次郎直実の信仰と、法然上人の信仰と一分も違うものなんて、そんなことはないですよ。熊谷直実は熊谷直実の信仰に生きたのです。法然上人は法然上人の信仰に生きた。

私は、在家から僧侶にさせていたのですが、僧侶になるとき、南無阿弥陀仏と申せと言われて、申しますと誓った。しかし、なかなか南無阿弥陀仏と申すということは難しいです。心の底から南無阿弥陀仏と申すのは、本当に難しい。

それで、僕はいろんなことを考えた。南無阿弥陀仏は仏と自分をつなぐ道筋だとか、自分の思いをありのまま歌に詠めば、それが仏に通じる、その歌の代わりが念仏だとか。あれやこれや考えたけれども、全部理屈です。今、熊谷直実の話が出ましたが、熊谷直実は法然上人のお話を聞いて、大きな山をスポッと越えたのです。

それを今の哲学者はアポリアだ、難問だと、道がないなんて言って、ここでぐだぐだ、ぐだぐだして越えられないのです、この山が。なぜ越えられないのか。理屈を言っているから越えられないのです。熊谷直実は理屈じゃなかったのです。もう、本当に熊谷直実は人生にこりごりしたんじゃないでしょうか。

源平の戦いで、我が子小次郎と一緒に、今の須磨の地へ行つて戦うのです。一の谷です。そして、一の谷の戦いで、ひよどり越えて上から降りてきた。そこで、平家は海に走った。熊谷直実が見たら、向こうに一騎馬がいた。その武士もなかなかの武士とみえて、引き返して帰ってくる。そこで、須磨の浜のところで二人が取っ組み合いをして、兜を開けてみたら、まだ若い自分の子供、小次郎と同じ年ぐらいの子です。平敦盛です。

とてもじゃない、こんな子を殺すわけにはいかんと言って、命を助けるから帰れと言う。

しかし、後ろを見たら、梶原やら何か味方の者がこっちに向かつてやってくる。今ここで返してもいづれ捕まってしまう。それならば俺が殺そうと言って、熊谷次郎はその平敦盛の首をとる。敦盛は十七歳です。

これで、熊谷次郎はつくづく戦いがいやになるのです。それから壇ノ浦の戦いが終わって引き上げる。そしてこの藤沢、今の江の島です。あそこまで引き上げてきた。今度の戦いはだれが考えたって、源義経の成果です。だから、義経は堂々と鎌倉に凱旋すべきものなのに、義理の兄貴の頼朝は、余りにも義経の鮮やかな戦いぶりに驚いたのでしょうか、怖かったのだと思うのですが、義経を鎌倉に凱旋させない。

それで、有名な腰越状という、自分の気持ちを率直に書く。その腰越状を頼朝に出すけれども、頼朝はそれを受け取らない。とうとう鎌倉を目の前にして、義経は都に帰るのです。そのとき熊谷直実はそこにいたはずなのです。

なんと理不尽な、と思いつながら熊谷の里に帰ったに違いありません。頼朝という人はちよつと意地悪だと思うのです。流鏑馬やぶさめというのがあるでしょう。流鏑馬というのは馬に乗って、パーツと行つて的を射るのです。鎌倉では、武士以上の人は馬に乗っていいのですが、武士以下の人は馬に乗ってはいけないことになっているのです。

それをこともあろうに、熊谷直実に「おまえは的を持って」と言つたのです。的を持つ人は馬に乗らないのです。片方、流鏑馬のほうは馬に乗って射るのです。それで、誇り高き直実は、絶対に嫌だと言ってそれを受けない。

そしたら、頼朝は、「いや流鏑馬は普段のルールではないのだ、だから歩いていたってそれで価値が下がるというものじゃないんだ」といくら言っても、それはもうそんなこと

直実が聞くわけもない。

頼朝は怒らざるを得ませんから怒る、そしてとうとう、熊谷の土地の一部を割いて鶴岡八幡宮に寄付してしまう。故郷の熊谷では、自分の土地をおじさんがかすめ取って返さない。いくら言っても返さない。

あのころは、一所懸命と言って一つのところに命をかける、そういう時代だった。そのときに土地を取って返さないのですから、これは裁判になった。そして頼朝の目の前で、おじさんと自分とでこれは自分の土地であるということを争った裁判が起きた。

そうしたら、おじさんは、ちゃんとそんなことは前から承知していて、梶原景時と裏でつるんで、この裁判を勝つようにしていた。ようやく、熊谷直実はことの真相を知って、ああ、これはもとから仕組まれたことだということで、腹を立てて、持ってきた書類を頼朝のいる御簾の中に投げ入れて、そして髻こしを切つて侍をやめてしまう。

そういうようなことが積み重なるのです。それで、もう熊谷直実はつくづく嫌になるのです。こりちゃった。本当に人生にこりたんだと思ふのです。それで、出家をしてしまふ。それで京都行つて法然上人に会ふのです。

それで、法然上人にそのことの一切を言う。法然上人が南無阿弥陀仏と申せという。ただそれだけだという。

熊谷直実は即刻、瞬時に念仏の世界に入つた。すなわち山を越えたのです。

哲学者は難問だ、道がないなんて言つて、ぐるぐる、ぐるぐる舞をしながら越えられない。熊谷直実はさつと越えた。その差です。

なぜ越えられたか。それは、人生にこりこりしたという、その熊谷直実の、己を見つめ

るもの、浄土教でいうと信機と言います。己の至らなさを信ずる。そうして、己の至らなさにくりこりしたときに、仏の力に包まれる。これが信法です。法を信ずる。この信機、信法、それがバツと一つになったときに山を越えたのです。

私はよくドイツの詩人のカールブッセの「山のかなたの空遠く、幸い住むと人の言う」の歌があるでしょ、あれが好きでよく言うのですが、「山のかなたの空遠く、幸い住むと人の言う」。山のかなたの空遠くに、幸が住むと思つて、「ああ、われ人と尋めゆきて」、人と一緒に尋ねていつて、「涙さしぐみ帰りきぬ」、涙をさしぐんで帰つてきた。尋ねて行つたけど、幸いはなかったのです。そして、「涙さしぐみ帰りきぬ」です。

「山のかなたの空遠く、幸い住むと人の言う、ああ、われ人と訪めゆきて、涙さしぐみ帰りきぬ」。熊谷直実は何度もそうだった。幸い住むと人が言うけれども、それで涙さしぐみ帰りきぬ、また、涙さしぐみ帰りきぬ、何度も、何度もそれを行っているうちに、本当に人生にくりこりしたんだと思うのです。

そういうくりこりた人のところに、ふわつと新しい世界が開けるのだと、そういうふうに見えるのです。それが、一つの越え方だと思ふのです。

だから、私たちは、それぞれ山の越え方を自分で工夫するしかないのです。余り棚からぼた餅のようにじつとしていたつて、ぼた餅は降つてきませんよ。やはり「涙さしぐみ帰りきぬ」という、その努力を何べんもしているうちに、人生くりこりするのではないでしょう。と僕は思うのです。

だから、私は、南無阿弥陀仏とは「なるようになる。なるようにしかない」と、そういうふうには翻訳しているのです。なるようになる。この世はなるようにしかありません。

絶対にそうなります。これは間違いない。必ず、なるようになるのです。

いくらあなたが慌てて、逆立ちして、どうしようと、なるようにしかりません。そして、そのなるようにしかない、それに身を任せるしかないじゃないですか。

そして、「死なば浄土へまいりなん」、浄土ということが、なかなか理解できないならば、法然上人が師匠と仰いだ、中国の唐の時代の善導大師は、「自然は是れ弥陀の国なり」という。

『法事讃』という書物の中にあるのですけれども、「仏に従い逍遙しょうようして自然に帰す。自然は是れ弥陀の国なり」、仏の教えに従って逍遙する。ぶらぶら歩くという意味合いですが、人生を歩むのです、仏の下に、そして自然に帰る。自然というのは、人のはからいをしていないということです。そういう人のはからいをしていない世界、それはまた天地自然でもあるのですが、その自然に帰る。

日本人はこれを昔から、土に帰ると言っていました。土に帰るのです。だから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申して、そうして平然と、淡々と、自然に帰っていく、そういうのが一つのまた生き方ではないかと思つて、私の念仏の、きょうのテーマの「来世への希望」というものを、そういうふうに理解しているということをお話して閉じさせていただきます。

(おわり)

法然上人を歩く

二十五霊場二十三番

高橋良和著『法然上人紀行』（探究社）より抜粋

京都
大本山

清浄華院

京都の寺町広小路はその西側が御所であり、その東側は学校街になっている。特に大本山清浄華院のあたりは、河原町通りを越えて府立医大、そして付属病院があり、この本山のならばには立命館大学、そして鴨沂高校、それに京極小学校などが立ちならんでいる。

また寺町広小路の上る下るの地域には明治の元勳として知られている三条実美父子を祭神とする梨木神社、その筋向いに天台宗の名刹であって、今は単立で円成宗の本山である盧山寺がある。元は船岡山にあったのがここに移ったので、その開創は慈恵大師良源、いわゆる元三大師となっているが、その後この地に移って中国の慧遠が結社を結んだことにならって、蓮社という組織をつくって念仏した寺でもある。

この寺には法然が撰述した選択本願念仏集を宝物として所蔵している。これは国宝であって、法然六十六歳のときの建久九年（一一九八）に、その帰依者である九条兼実の懇請によって、法然自ら他力本願の浄土の法門の深旨を述べたものであり、浄土宗の教義の眼目

を記したものである。その草稿がこの寺の選択集であって世にいう盧山寺本と称している。寺自身には法然との縁りはないが、この盧山寺本の選択集は浄土宗にとってはなんとしとても大切な法然の書物であるので、そういった意味ではこの盧山寺は浄土宗でよく知られた寺であるといえる。

二月三日の節分の追儼は異色であって、元三大師の修法を邪魔した鬼が、三鈴で退散するという追儼で、京都では珍しいものであり「雲井の水」という井戸や、近年紫式部の源氏物語執筆のところとしての記念碑も建てられている。

盧山寺を南側に日蓮宗といっても、法華宗本成寺派の本山である本禪寺を北側にして、その中にはさまっているのが、浄土宗の大本山清浄華院である。この寺へは河原町通りからも、寺町通りからも入ることが出来るが、寺町通りが正面の山門なのである。

門もそう大きくはないし、境内もまた広くはない。一見すると普通の町の寺と同じような感じもするのは、この寺の堂宇が明治以後の建造物で、比較的新しいからであるのだろう。創建は貞観年間で（八五九―八七七）あって、清和天皇の勅願であり、慈覚大師創建の寺でもあり、御所の禁裡内道場として創建されたので、皇室に縁りの多い寺である。法然が浄土宗を立教した以前にあった寺であるから、昔は天台宗であって、法然が皇居に赴いて後白河天皇に受戒を修したときに、この寺がその宿舎となったのである。凡そこの天皇ほど仏教に心を寄せた方はないし、天皇の皇子も守覚と道法が仁和寺に、円恵と定恵が天王寺、静思が聖護院、承仁が延暦寺にそれぞれ法親王として入寺しているし、このほかに真禎が大僧都、恒恵が僧正になっているのをもみてもわかる。

法然から戒をうけた後白河天皇はまた法華経、如法経、尊勝陀羅尼経、理趣経、そして

孔雀経、薬師経なども非常に重んじたということであり、三十三間堂の建立もこの天皇の時代であり、また当時の六勝寺という六つ寺への御幸も度々であったといわれている。まことに仏教に帰依の心の深い天皇であった。

法皇となって後も法然を善知識として、その導きをうけ、建久三年二月二十六日の崩御の際も法然が御臨終の儀式を定めているほどである。

そうであるからこの堂宇を拝領したものであり、そのなかに十二光仏になぞらえて十二光院を建てたといわれている。もとは土御門内裏の付近にあったので、上京区の上長者町烏丸西入るの地であるが、天正年間（一五七三—一五九二）に豊臣秀吉がこの地に移転している。

御影堂は他の本山のような豪荘さはないが、小じんまりとしており、ほかに阿弥陀堂が廊下つづきにある。また不動堂があり、泣き不動という画像が安置している。これは証空（西山派の派祖）が師の臨終にあたって、その身代りになろうとしたところ、信仰している不動尊が、自分が証空の身代りに立つと告げたということから、身代り不動と名づけている。そしてこの物語を記した紙本著色の宅間法眼筆の泣き不動縁起や、同じ紙本著色唐晋悦筆の阿弥陀三尊像三幅があり、鐘樓の銅鐘は慶長十五年（一六一〇）の銘がある。

本堂の本尊は法然の像であるが、清和、村上両天皇の尊像や、歴代天皇の尊牌がまつられているのは、皇室を縁故のあることをあらわす寺であるし、境内の東側にある墓地には後陽成、後水尾両天皇の皇子、皇女の墓があり、また織田信長の密旨をつたえた立入宗継や、皇居造営に協力した山科吉継郷、それに猿が辻で斃れた姉小路公知郷、また幕末の際国事に力をつくした玉松操の墓もあり、ほかに名家の墓も多く存在している。

第四十一回

江戸を歩く



墨田堤を行く

大江戸ウォーカー
森 清鑑

この水戸下屋敷に幽閉された。しかし、ペリ
ー来航とともに海防参与として斉昭が幕政に
復活すると東湖も上屋敷に復活。辣腕をふる
う。その時、安政の大地震が発生。一度は避
難したのに火鉢の火を心配した母親が邸内に
戻ると、東湖も共にする。その時、大きな梁
が落下。彼は母親をかばい、圧死。西郷は東
湖と会い、「清水を浴びたような清らかな心
になり、帰り道を忘れるほどであった」と述
懐している。謹慎中、東湖は竹矢来に囲まれ
た長屋の中でひたすら読書に励む。その姿勢
がまた話題となった。幕末の海防に腐心した
江川太郎左右衛門や剣豪、神道無念流練兵館
創立者、斉藤弥九郎は親友。明治になると慶
喜も母親をここに住まわしている。

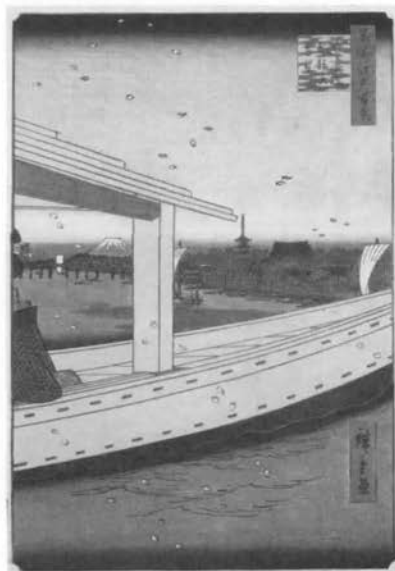
この吾妻橋と水戸下屋敷にちなむ断が落語
の名作「文七元結^{もつと}」である。本所達磨横町に
住む左官の長兵衛。腕はよいが大酒飲みの博
打打ち。借金がかさんで夫婦喧嘩が絶えない。
ある日、博打に負けて帰ってくると十七の愛

娘、お久がいない。うろたえまくっていると
吉原から便り。お久は吉原に身売りして親の
借金を返そうとする。直ぐ駆けつけると吉原
佐野槌の女将がお久をそばに長兵衛にこんこ
んと話を聞かせる。この女将が良くできた人
で「借財の五十両は立て替える。来年の大晦
日まで待つから返済せよ。それまでお久は客
に出さない。それどころか女一通りのことを
習わす。でも大晦日を一日でも過ぎたら客に
出すよ」。お久も「博打を止めて。お母さん
をもう泣かせないで」と懇願。がくんときた
長兵衛、五十両をふところに涙ながらに吾妻
橋を渡る。と一人の若者が欄干を乗り越えて
今にも大川に飛び込もうとしている。慌てた
長兵衛、駆け寄ると若者を羽交い締めを抱き
かかえ、「ちよつと待った」。「死なしてくだ
さい」と若者。「どんな分けか知れねえが、
命は一つしかねえ」。「私は横山町鼈甲屋近江
屋の文七という者ですが、本日小梅の水戸様
に伺い、掛け金五十両を受け取りましたが枕

橋ですられてしまいました。死ぬしかありません。「ああ、俺はなんて金に縁がない男だ。今日、娘を吉原に売った金がちょうど五十両ある。だけどまずお前が死んではならねえから持つてけ」と「こんな大金いただけません」という若者に放り投げるように押しつけて走り去る。店に帰った文七が五十両を差し出すとすでに五十両は水戸様から届いているという。甚好きの文七が集金の際、水戸の士と碁に夢中になり置き忘れた。慌てて届けに来てくれたとのこと。吾妻橋での一件を聞いた主人はすぐさま番頭に言いつけて吉原佐野槌に向かわせる。そして翌日、この主人と文七が達磨横町に長兵衛を訪ねる。主人、吉原の女将に五十両を差し出し、お久を身請けしてきた。ところが長兵衛は「江戸っ子の瘦せ我慢。出した金は受け取れねえ」とわめく。「ああ、世の中には親切な心意気のお方もいるものだ。近江屋からのこの五十両は受け取ってください。他に酒と肴を用意しました」。主人

角樽を差し出す。酒はもらうが肴は塩で良いという長兵衛に「肴はお久さんです」と差し出す。涙を流す夫婦に主人は「そのかわり一つお願いがあります。この文七の親代わりになつてほしい。つまり、文七とお久さんを夫婦に」。見ると真新しい籠から文金高島田の着飾ったお久が出てくる。この文七、お久の夫婦、麴町に小間物屋を出し、後年、文七は工夫を凝らした元結（髪のもとどりを束ねる紐や糸）を編み出す。さあ、これが髪結の間

◆広重 吾妻橋展望



で評判となり、文七元結と呼ばれ、江戸中の評判をさらった。

大川と水戸屋敷堀の端境道を北に歩く。堀が切れたところから小梅村の田畑が広がる。すると前方に三囲稲荷（三囲神社）の森が見える。木々が正方形の稲荷地をぐるりと囲み、広い田園に忽然と存在している。雪且は大川から稲荷社に向かう光景を描いている。歩いてきた道の右に鳥居が立ち、畑を割って一直線に伸びている参道。参道の両側には木々が立ち並び、二の鳥居を潜ると稲荷社の山門。大川から舟で参拝する者も多く、川から道に上がって一の鳥居を潜る人の姿も見える。対岸の今戸橋から来る竹屋の渡の船着き場でもある。この広々とした光景は現代では想像もつかない美しさで溢れている。古来、白狐に跨る老爺の神像が出土した時、忽然と現れた白狐がこの像をぐるりと回り息絶えた。三囲の名称由来である。しかしこの稲荷社が江戸で有名になったのは元禄の頃で、雨乞いにあ

る。元禄六年（一六九三）の干ばつで芭蕉の高弟、宝井其角は請われて「夕立や田をみめぐりの神ならば」と詠む。その翌日、雨がふる。このことが江戸で評判となり、豪商三井はここを三井家の守護神と定め、先祖を祀る霊社を建て三柱鳥居を寄進。現在でも三越本店前に鎮座するライオン像と同じ像が狛犬、狐像の後ろにでんと控えている。

牛御前社

参拝をすませて、大川沿いの街道に出て、再び北に歩くと畑が途切れ、道の右側一帯が鬱蒼とした森に包まれる。牛御前社である。道沿いの森中に牛御前社（別当は最勝寺）、東に弘福寺、北に長命寺。三社が寄り添って



◆江戸名所図会 雪旦 三囲稲荷。手前が大川

いる。大川沿いにある牛御前社は「国土に騒乱あれば牛頭を戴き天下安全の守護たらん」とのご神託の元に慈覚大師が創建。江戸本所の総鎮守府となった。この辺りの地名が牛島であるところから、牛島神社とも。しかし、江戸っ子は通常、王子権現と呼んだ。

勝海舟は「氷川清話」で次のように語っている。「俺が本当に修行したのは剣術ばかりだ。寒中になると師匠の島田虎之助（幕末の大剣豪）のさしずで稽古がすむと夕方から稽古着一枚で王子権現に行って夜稽古をした。拝殿の礎石に腰をかけ、瞑想し、木剣を振り回し、また座る。これを夜明けまで繰り返し、本所に戻って朝稽古。始めは夜中にただ一人、樹木の風に鳴る音が凄まじく身の毛がよだつた。しかし、しだいになれ、かえって趣を感じるようにさえなった。同門生が二、三人来ることもあったが寒さと眠さに避易して、いつも傍の百姓家をたたき起こし寝るのが常だった。しかし、おれは馬鹿正直にもそんなこ

とは一度もしなかった。この修行の功が幕府瓦解の前後にあらわれて、あんな艱難辛苦に耐え得て、少しもひるまなかった」。牛御前社は、関東大震災後、水戸屋敷北側内に移転、牛島神社として偉容を誇っている。石の「なで牛」が鎮座し御利益に預かろうと参拝者は撫でていく。そして牛のお守りをもらう。この三輪鳥居（正面鳥居の左右にも鳥居）は珍しい。

〔参考文献〕

- 江戸名所図会下巻（角川書店）
広重の大江戸名所百景散歩（人文社）
東京路上細見 小橋山俊著（平凡社）
江戸史跡事典下巻（新人物往来社）
氷川清話 勝海舟自伝 勝部貞長編（広池学園事業部）
江戸明治東京重ね地図 中川恵司編（エービーピーカンパニー）他

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

俳優としての白井晃を初めて観たのは、'00年PARCO劇場『オケビ!』（三谷幸喜・作）のサククス奏者の役で、スマートな長身と知的な風貌がひと際目立った。三年後の再演では真田広之に代って主役のコンダクター役を演じていて、私はそれはのちにDVDで観ただけだが、洗練さにさらに磨きがかかっていた。

演出家としての白井晃に最初に注目したのは、'01年新国立小劇場『ムーン・パレス』（ポール・オースター原作）で、在来の前衛的な不条理演劇などとはまったく一線を画す、都市的でひんやりとした不思議な感触の新しさが強烈な印象だった。

しかし考えてみたら、白井晃の存在はテレビドラマを通じてもうとっくに知っていた。'95年フジテレビ『王様のレストラン』（三谷幸喜・作）のあのかつこいいソムリエ役がその人だった。十数年を経た今もあの映像は、特にレストラン関係の人たちに鮮明に記憶さ

れていて、店でワイン選びの際などに、「あ、お詳しかったんですね」と本物のソムリエに言われて照れることがあるという。

今回、白井さんにはPARCO劇場『幽霊たち』（ポール・オースター原作）観劇後にお会いすることになった。現代アメリカの小説家であるオースターの作品の舞台化は『偶然の音楽』に続いて三作目。よほどの入れ込み方だ。

「彼の小説を最初に読んだのは三十代のころ、『孤独の発明』（柴田元幸・訳）です。読んでいるうちにそれまでにない感覚に身体が包まれたようになって、まず震えが来たんですね。それから自然に涙が出てきた。自分という存在の不確かさと、自分が立っている世界の曖昧さ。そこに立ち尽くす主人公の孤独の深さに共鳴……というより、共振してしまったんです。オースターとの出会いは、僕にとつての大きな転機だったと思います」



「遊●機械／全自動シアター」立ち上げの頃の白井さん

白井さんは'57年京都生まれ。早稲田大学卒業後、電通PRセンターに五年間在籍し、'83年高泉淳子と共に「遊●機械／全自動シアター」を結成、芝居とジャズを組合せたショー「ア・ラ・カルト——役者と音楽家のいるレストラン」を定期的に公演していた。'02年にはこの劇団を解散している。

「かねがね『ムーン・パレス』というオースターの自伝的小説を舞台にしたいと思ってたんですが、寓意と現実が交錯する広大な長編を前にして、方法が見つからずに、いざとなっても途方に暮れてしまっていたんです。稽古場に俳優たちを残して四日間も町をさまよったりした（笑）その揚句、ちよつとみんなに舞台の上をただひたすら歩いてもらった。何もない空間を人が歩いていて、他人とすれ違ったときの瞬間の安堵感。もしかするとこれがオースターを演劇で表す手がかりになるのではないか。孤独な人々が交錯しながら歩く姿、というのが、僕のオースター演劇の基

になっっているんです」

オースター劇の三作目、『幽霊たち』に出演した奥田瑛二さんが言う。

「テキスト（小説）からみんなでいろんなものを生み出していくという白井演出がすごく新鮮に思えた。僕は子供のころから教えらるるのが血が逆流するほど大っ嫌いだね（笑）。しかし新たな演劇人としてもう一度進むために、この際白井さんを信用して、従ってみようと思った。一人で考えるんじゃなく、相談して一緒に辿り着く、というのもいいな、と思ってるね」

白井さんにとって先輩の俳優・演出家・映画監督である奥田さんにここまで言ってもらえるのはすごい。

白井さんはどんな少年時代を過ごしたのだろう。

「父は会社を作る前は個人営業の電気技師でした。劇場やホールの照明主任も担当してい

て、ダンスホールの照明室の小窓からスポットライト当ててるお兄さんたちの姿を子供のところから見てたので、大人の世界をのぞいてるようでワクワクしました。ときどきエロチックな恰好をした踊り子さんたちが後ろを通ったりして（笑）、そういう舞台ウラの世界をもう見ちゃってたんですね」

70年、大阪万国博覧会が開かれたとき、白井さんは小学六年生だった。

「父が日立館のパピリオンでシミュレーションゲームのハシリみたいなものを担当して、入場者が右か左か決めながら進んでって、事故が起きるとバーンと発光したりする。とにかく息子にそういう夢みたいな世界を見せたかったんでしょね。作業員みたいな恰好させて自分のクルマに乗つけて、通行証出して手伝ってる感じで毎日連れてくんです。少年の心としてはあの世界が気持をぐんと昂揚させてくれる場所だったんですよ」

少年のころ、習字、ソロバン、水泳、ピアノ

ノと習いごとがたくさんあった。

「ピアノはあんまり練習は好きじゃなかったけど、先生はいい音がする、タッチがいい、と褒めてくれて、中学一年のときカワイのピアノコンクールの近畿地区代表になったんです。大阪市立中学というのは当時男子は全員丸坊主が規則で、会場は東京のイイノホールだったんだけど、女の子ばっかりの中に坊主の男の子が一人。自意識過剰になりますよね。でも前日の稽古見てたら、これは僕もらったな、と思った。それで本番の日。頭の中でさうって、一瞬あれ？ と思うところがあつたときに『白井君』って呼ばれて出て行ったら会場がクスッとしたみたいな感じがした。カーッととなっちゃって、さっき気になった箇所が近づいてきたらドキドキして、そこをミスタッチしちゃったんです。入賞を逃して客席で号泣して（笑）、ピアノはそれできつばりやめました」

大阪府立天王寺高校を卒業して一年浪人し

て京大をめざすが失敗し、立命館大学に入学。「浪人の間、映画ばかり観てました。溝口健二、黒沢明、そのうち大島渚とかのアバンギャルドな映画。京大に受かる可能性なんてひとつかけらもありませんよ。さすがに二浪はできなくて立命館へ。というのは当時その文章に感化されていた梅原猛さんが文学部の教授だったので講義を聞きたかったんです。が、僕の入った年に退任された（笑）。でも一応哲学科に籍を置いて、キエルケゴールや、サルトルの実存主義に傾倒していくんです」近ごろの白井さんの服装はいつ見ても上も下も黒づくめだ。あのころ「実存主義の女王」と言われたシャンソンのジュリエット・グレコがいつでも黒いドレスだったことを思い出した。

白井さんは立命館時代、演劇と決定的な出会いをする。場所は京大の構内だった。「公演のチラシを見て、京大の西部講堂とい

う木造の汚い不思議な場所。そこで大駱駝鑑の暗黒舞踏の人たちが全身白塗りでのたくつていたり、能楽堂に太田省吾さんの転形劇場が来たりする。また、加茂川のほとりには唐十郎の状況劇場が来て、『蛇姫様』に根津甚八や小林薫とかが出てた。うしろのテントがあくと夜の加茂川が見えて、そこへ役者がワアーツと入って行ったり。それまで考えていた演劇とはまったく違ったものがそこにくり広げられていて、子供のころの万博のお祭り気分とは少し違った、お化け屋敷とか迷宮に入りこんだような気になって、毎晩観に行っていました」

そして運命の出会い。

「やっぱり京大の西部講堂でした。早稲田大学の演劇研究会の公演があつたんです。シェイクスピアの『真夏の夜の夢』の幕切れのせりふから取って『お手をどうぞー花の褥の夢泥棒ー』という芝居。四畳半ひと間に住んでる男が自分はドン・キホーテだと思ひこんで

白井さんの中学生の頃のピアノの演奏風景



しまつて、風車と同様に普通の人たちが自分に向つて敵のように見える妄想に取りつかれた男の話なんです。当時狭い部屋で一人暮らしをしてた自分とすっかりシンクロしてしまつて、個と社会ということを……母親がよく僕に、社会に出たらそんなことは通用しない、つて言つてたんで、絶えず社会つてなんだ、他者つてなんだ、他者は敵で、自分を孤立させるもの、つていうイメージがあつたんです。それで最後に、その男が自分で作つた椅子の馬に乗つてワーツと攻めて行くと、四畳半の

襖が三方に倒れて、後ろに濡れたまっ白なワイシャツを着た女性がスーッと立っている、というすごい幻想的なシーンがあったんですよ。なぜか感動してしまって涙が出たときに、天井からレモンが五百個ぐらい、パーツと降ってきたんですね。甘くて酸っぱい匂いがして、そういう演劇観たことなかったし」

白井さんは結局同じ芝居に四日間通った。

「今思えば当時の演劇学生は、脱新劇第一世代と言われた寺山修司、唐十郎、佐藤信、鈴木忠志とかに影響受けてたんですね。だからあれは鈴木さんの舞台でキャベツがたくさん降ってきたのがあって、それをレモンに変えただけなんだけど（笑）、当時の僕は初めての経験だったので驚きました。楽の日に僕のここへ転がってきたレモンを一個拾ってきて、そのときの興奮を忘れないために勉強机の上にずっと置いてました。この日に僕は、そうだ、早稲田へ行こう、行ってあの人たちと芝居をしよう、と決心するんです」

白井さんは猛烈に受験勉強をして翌年みごと早稲田に合格する。

「目的意識を持って勉強したのはあれが初めてでした。机のレモンが茶つぼくなるまでヤミクモに勉強して、上京の日、青春ドラマみたいに京都タワーに向って、君には当分会わないからな（笑）、つて誓って出て行っただです。弟も千葉大の受験で両国のホテルにいたので、床に寝かせてもらって早稲田を受けて、受かったときは嬉しかったですね。入学手続きをする前に、もう演劇研究会の門を叩いてました。入れてくださうい、つて（笑）。そこからもう完璧に、僕の人生は演劇へとスライドして行くんです」（つづく）

○白井晃さん情報

11月5日～20日の新国立劇場中劇場、泉鏡花「天守物語」を演出。

宿縁しゆくえん空むなしからざれば同じき一蓮いちれんに坐ざせん、浄土の再会甚だ近きにあり。今の別れは暫しばしの悲しみ、春の夜の夢のごとし。

(法然上人「御流罪の時、門弟に示されける御詞」)

この世でのご縁がかりそめなものでないならば、往生のあかつきには、同じ蓮の台に一緒に座りましょう。

お浄土での再会は間近なのですから、今、ここでのお別れも一時の悲しみ、春の夜に見る夢のようなものです。

浄土があつて、よかった

いつか、行く先を決めない旅をしたい。お気に入りの鞆に荷物を詰め、フラッと出掛ける。駅に向かい、最初に来た電車に乗る。その後のことは、サイコロか即席のアミダ籤にでも委ねてしまおう。気が向いた駅で下り、景色を楽しみながら散歩に興じる。土地の古老との会話も、きつと愉しいだろう――。

梅の香にそそのかされてそんなことを考えていた矢先、大地震は起きた。多くの方々と同様、被災地で何かできることをしたいとの思いは筆者にもあった。しかし若干ではあるが自坊も被災、片づけや修復にバタバタしていた。ガソリンが手に入るようになった四月以降二度ほど故郷の仙台へ行ったが、足の踏み場もなく、壁から青空が覗けるようになったままの実家の引越し、親戚や知り合いの寺への見舞いとで時間は過ぎ、他人様をお手伝いする余裕はなかった。

あまりにも遅きに失しはしたが、九月上旬、その思いが叶った。全国浄土宗青年会（全浄）の復興支援企画で、津波で被災された宮城県石巻市のお寺に墓地の瓦礫片付けにうかがう機会を得たのだった。お寺に着いて啞然とした。ほんの一部を除き墓石は全て倒壊。しかも、津波で流された自分の家の石がどこにあるかわからない状況。震災直後から、何度も当地にボランティアに来ていたという神戸の浄青会員は、「これでもずいぶんきれいになったんですよ」と、

三月末に撮った写真を見せてくれた。言葉が出ない。一帯、まるでがらくた集積場だ。墓石はその下に埋もれていたのだという。

学生時代の後輩でもあるそのお寺の次男が出迎えてくれた。会うのは何年ぶりだろう。気丈な笑顔を見たら涙が出そうになった。まずはご本尊さまをお参りさせていただく。本堂に流れ込んだ大量のゴミや瓦礫は、ボランティアの方々の懸命な作業で片づけていただいたと説明を受ける。左右脇陣に置かれたテールに夥しい数のお骨箱と白木の位牌が並んでいる。皆、津波の犠牲になった檀信徒だという。その数百三十人以上。しかし、いまだご遺体が見つからず、葬儀をためらっている方もおられるらしい。これらのご遺骨はいつになったら納骨してさし上げられるのだろう。墓地が、それが可能になるのはまだまだ先になるだろう。それぞれのテールの前でお線香を手向け、お十念を称えた。

陽が傾きかけ、作業を終えて帰る間際、彼が筆者に話しかけた。

「浄土の教えがあつて、よかったですよね」そのとおりだと、強く思った。

「死んだら終わり、何もない」「お墓なんていらない、お骨は山に撒けばいい」ふだんはそんな強弁の人も、このたびの惨状を目の前にはおそろく口をつぐむに違いない。逝かれた方にとっても、残された者にとっても、安楽な来

世、再会の叶う来世が、どうしても必要である。このたびの震災により、それが「必要なところであった」ことに、あらためて気付いた方も多いと聞く。

逝き先の決まっていらない死ほど心細いものはない、恐ろしいことはない。安心できる逝き先があることの確信は、辛く、いたたまれない現実を、やがて受け入れられるようにもしてくれるだろう。先立った方々と落ち逢える場——浄土——への一つの窓口ともいえるお墓が、残された者にとって大きな心の縁^{よすが}となっている事実も、否定のしようがない。

もう二十年近く前、祖父の葬儀を営んで下さった他宗のご住職がお斎の席で漏らした、「いいですね、浄土宗は。死んだら安楽浄土に生まれて、また逢えるんですよ、はつきり説けるんですから……」との言葉が思い出される。

「行く先を決めない旅をしたい」などという願いは、所詮は帰る家がある、この世での旅だからこそ言っていられる「おたわむれ」でしかない。

いずれ発つ、次の生の旅へ——ああ、浄土があつて、よかった。

残暑厳しい日差しの中、むき出しとなったカロートからお骨壺を、丁寧に取り出し、きれいにしてまた納め直していたお檀家さんの姿が、睨みから離れない。

(小村正孝)

「法然上人をめぐる人々」

師を慕う 親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第五回

法然上人様のみ教えを聴聞されて――

十三

「法然上人様のみ教えを聴聞されて、殿の迷いは払拭されたのでございますか」

夫の顔に眸をあてて恵信は尋ねた。

「一日の聴聞が終ると、心の闇は一枚めくれていった。たとえお上人様の教えに騙されて地獄に堕ちるとしても、わたしはお上人様に従って生きていこう、あの日々に思ったことは今も変わらぬ」

親鸞は深い息をして、

「この世に二人と在おわさぬお方であった。み弟子たちは法然上人は阿弥陀如来の生まれ変わりでと言っていたが、まこと、人の世を救うためにこの世にこられた弥陀如来というべきお方であった」

親鸞が法然上人の弟子となった建仁元（一二〇一）年、日に日を継いで吉水の草庵を訪れる男女は多く、草庵の奥に建つ、教えを求

めてやってくる人々のための飯屋も「繁盛」を極めていた。六角堂を出た親鸞は百日間はこの飯屋に宿泊して日々法然上人の教えを聴聞。やがて縁を得て洛内の知り人の家から熱心に吉水に通った。

その熱心と優れた求道心は群を抜き、やがて彼は師僧法然上人の愛弟子の一人となっていた。

叡山で「範はん宴えん」と名乗っていた親鸞が中国浄土教の祖師「道綽どうちやく」と法然上人「源空」の一字をもらい、「綽空」と名を改めたのもこの頃である。「士は士を知る」というが、法然上人はこの新入りの弟子の優れた資質と真摯な人となりを深く愛した。

この頃、綽空は法然上人の主著『選択本願念仏集』の書写を許され、終日、吉水の草庵にこもって一心に書写に努めていた。

『選択本願念仏集』は秘本であった。念仏往生の教えが「念仏さえすれば、どんな悪を犯しても救済される」と誤って伝えられること

を懸念された法然上人は、信頼に値する弟子以外には書写することを許されなかった。弟子になって幾ばくもしない綽空が書写を許されたということのうちに、彼がいかに師僧から信頼された愛弟子の一人であったかがわかるのである。

『選撰本願念仏集』の書写の書き写しが完成した日、法然上人はそこに内題と標拳と「釈綽空」の名を真筆で書き入れられ、同じこの日、親鸞は許されて法然上人の画像の図画にとりかかった。元久二（一二〇五）年四月十四日のことで、法然上人のもとに弟子入りして五年目、彼は三十三歳になっていた。

※『選撰本願念仏集』標拳は

「南無阿弥陀仏」

「往生之業念仏為先」

の二文。

画像が完成したのは同じ年の閏七月二十九日である。

その画像に、師僧上人はご自身で銘文を書

きいれられた。

「絵心のないわたくしでございますので、手本となる師僧の画像を参考にしつつ、やっと描き上げました」

感激の中で綽空は言った。完成するまで、師僧の画像を持つ弟子を訪ねては参考にし、何枚も下絵を描いた末に百日の余を掛けてやっと完成した画像であった。

「かつて蓮生房（熊谷直実）も東国へ下るとき、わたしの似絵（肖像画）を描いて持っていこうとしたことがあったが」

法然上人は綽空の画を見ながらつぶやかれた。

「出来上がったものはわたしに似ていなかった。そこで自分に対して癪癪玉を破裂させた直実は、紙を破り捨ててそのまま関東へ旅立っていったことがあった……」

壁に張られた一枚の画像を師弟はともに見上げた。

草庵の青葉の中を風が吹き通っていく。

十四

綽空は膝を改め、両手を床に就いて法然上人に言った。

「師僧の御許しをうけて、わたくしは近く妻を迎えることになっております」

「おお、そうであった」

慈しみのこもる眼差しを綽空にむけて法然上人は言われた。

「幸せに暮らされよ。この度のことでは九条殿もお喜びであった」

「実はそのことでございますが、妻を持つのを機会に名を改めたく存じます」

綽空は言った。

「弟子の一人にさせていただきました時、わたくしは道綽大師と師僧の御名の一字をそれぞれ頂き、綽空と名乗ることになりました。しかし、妻帯いたします今、この名は余りに畏れ多いことでございます」

綽空の言葉をじっと聞いておられた法然上人はお答えになった。

「弥陀の前に、妻を持つか持たぬかの区別はない。ただし改名は畏れ多いゆえにはなく、新しい己に生きて行く区切りとして良いかも知れぬ」

しばしの沈黙が師弟の上を流れた。

「新しい名はすでにお考えか」

師僧は尋ねられた。

「……畏れ多いことながら、この度改名するにおきまして師僧にお願い申し上げたく、自身では未だ考えておりませぬ。何とぞ名前をいただきとうございます」

綽空は床に頭を伏していった。

沈黙のひとときがふたたび訪れた。

「はて、そなたにふさわしい僧名は何であるう」

法然上人はそうつぶやかれると、

「親鸞はどうであろう。世親菩薩から親の名を、曇鸞大師から鸞を名を戴くのだ」

「あつ」綽空は思わず小さな叫び声をあげた。言うまでもない、現在のウズベキスタン・ベシヤワール出身の世親菩薩は大乗仏教の「空」の思想を、人間の精神現象との関係において詳述。唯識思想を成立させるとともに、晩年は浄土教の信仰に基づいて『浄土論』を著し、後世に多大な影響を与えた祖師であり、中国山西省出身の曇鸞は、この世親の『浄土論』を注釈（『浄土論註』）。後世の浄土教家に大きな影響を与えた祖師であった。菩提流支から『観無量寿経』を授けられたのも曇鸞である。

二人は道綽大師にとっても祖師であった。

（「凡夫綽空にとつて」）

綽空の心に深い畏れとも慎みとも分ち難い思いが走った。

（これは余りに大きすぎ、わたしが戴くには余りにも隔絶した御名ではないか…）

彼は叫ぶように言った。

「お上人様。どうかお許しく下さいませ。そ

のように大きな御名を戴くにはわたくしはあまりに凡夫ほんぶでございます。あまりに相応しからぬ、凡夫でございます」

「そなた、何を言う」

滲みでる微笑に深い威厳を湛えて法然上人は言われた。

「僧として妻を持つそなたは、今後、念仏者として全く新しい道を歩いていくのだ。その道も亦、妻を持たぬ出家者と同じく、阿弥陀仏のご誓願に叶った道であることを、そなたはこれから世に示していかねばならぬ。その道もまた正しい道であることを、浄土教の始原に帰って極めることもまた、そなたに託された使命である」

法然上人は、床に伏したままの綽空に懇々と諭された。

「叡山を下りたそなたが念仏者であるとともに、いかに探求心深い僧であるか、そなたが吉水に来てからわたしは見てきた。この名を辱めず、この名に生きよ」

そういうと法然上人は

「親鸞」

と禪空に呼びかけられた。

十五

ところで、これらの日々が、平穏な時代であつたと思つてはならない。

それは浄土宗史上、やがて迫り来る受難の日々を予兆する、風雲急を告げる年月であつ

た。

都のそここの辻々に念仏の声が満ち、なかには天台を謗り、造悪無碍を称える者も現れ始めていたのである。これを怒った延暦寺衆徒が座主真性に専修念仏の禁止を訴え出たのは、親鸞が法然上人に帰依して三年目の元久元年（一二〇四）の冬であつた。

事態を憂慮された法然上人が世に名高い「七箇条起請文」を延暦寺に送り、門弟に対してはその行為を厳しく戒められたのは同年

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018012145231



十一月八日。門弟百九十人が署名した。

親鸞も「僧諱空」の名で署名している。

翌年十月には興福寺の僧たちが「興福寺奏上」をもって朝廷に押しかけ、九箇条の失を挙げて念仏停止を後鳥羽上皇に強訴。

さらに興福寺の強訴はこれに止まらなかった。衆徒はさらに念仏停止を時の摂政九条良経に、つづいて後鳥羽上皇に、かさねて訴えつづけた。

政界は次第に、念仏停止に向って円を狭めていったのである。あと一歩、何かが起これば事は一挙に暴発する様相を呈しはじめていた。

まさに時流がかかる緊張をはらんでいる只中に起きたのが、安楽・住蓮事件であった。

美男であり、美声の持ち主であった安楽と住蓮に、後鳥羽の留守中、上皇に仕える二人の女官が帰依し、出家したのである。二人の僧は法然上人の弟子であった。

熊野詣から帰京した後鳥羽は怒り狂った。

かねて叡山、興福寺から念仏停止の強訴がなされて後鳥羽としても対策を講じていたところに、このさまである。後鳥羽に仕える女官が美男美声の僧に帰依して出家したことは、男の誇りを、また上皇の誇りを、深く傷つけるものであった。

権力者は怒った。

かくして建永の法難は起こった。

専修念仏禁止の院宣が下り、法然上人と門弟に罰が下された。

建永二年（一二〇七）二月のことで、安楽住蓮ら法然上人の弟子四人は死罪。上人は四国に、親鸞は越後に流罪になった。

この時、第一の高弟法蓮房信空は流罪を免れ、直弟子とはいえ入門してまだ日の浅い親鸞が流罪となったのはなぜか。

建永の法難に際し、実は後鳥羽の怒りは還俗もせず、また朝廷の許可もなく、ただ師僧法然上人の許しだけで、いわば「堂々と」妻帯した親鸞にも向けられていたのである。



浄土誌上句会

●自

〈特選〉
自力とは思えぬ高き蟬の殻

山口 信子

長い地中の生活を終え、地上の木の枝などにすがって殻を脱ぐ。安全と思える高さに至れば十分なのに、この蟬はこんな所にまでと驚くほどの高さに、殻を残しているのだ。作者の目を見張っている様子がよく見える。

〈佳作〉 自然薯を携え農夫寺詣で

佐藤 雅子

自転車を山門に置き松手入れ

山本 誠二

自販機の灯に淡き利根草

佐藤 ゆう

●然

〈特選〉
平然と子らの前這う青大将

浜口 佳春

夏になると何年かに一度は、まるで邪魔をするように、路地にのたっているのを見かける。これは子供の前をゆったり這って行くの

だ。棒切れを探す子なども居て、大変な騒ぎである。子供の頃を思い出す句だろう。

〈佳作〉

やがて渾然となりゆく花野かな

相川 祐司

野も山も已然形なり秋の暮

江崎 美美

雑然と微臭き書庫先師の句

石原 新

●自由題

〈特選〉

虫籠のごとき店舗や高架下

天谷 宗治

鉄道などの高架下に、小さな店が連なっているのを、よく見かける。虫籠のようだというのは、その小ささなのか、ガラス戸の棧など、外見によるものか。その辺は読者の想像に任されている。かわいい感じがよい。

〈佳作〉

帽子屋に帽子あまたや鳥渡る

島崎 宣子

稲妻や親にすり寄る幼き子

近藤アツ子

秋暑し病みて葉のまたふえて

吉崎美和子



誌上句会 〈編集部選〉

■自

自我を張り我が身の幼さを知り
もう自立せぬは案山子の反抗期
稲架解けば駅伝の自主練習生
敬老日自動二輪で勇ましく
色鳥の自由時間となりにけり
鮎釣りの竿自在なる早瀬かな

■然

然らばと説法聴くも目は花野
憮然たり由なき噂聞き及び
陛下より法爾然りと尊ばれ
自然著の髭の泥まで誇らしげ

森 懐人

浦田裕作

安住百合子

水沢玲子

結城智哉

井村善也

佐藤雅子

森 懐人

飯島英徳

前田由美子

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇二一年十二月二十日

発表・『浄土』二〇二二年一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

売れ残る泰然自若柿ふたつ
然り水澄めりと澄まし顔で言う

鍋谷宗治
紺野 敬

■自由題

ちちる虫居心地良かれ弥陀の前
仲秋の名月愛でつ露天風呂
どこからか革の匂いがすれば秋
人声の上を電車がゆく夜長
コスモスが揺れると雨が降ってくる
老人が最初に秋の風もらう
月天に切り子ガラスは鋭角に
本尊の隣の梨を見ておりぬ
秋冷の壁に掛けたる古帽子
秋空や改札口は北を向き
ほしがきというもとかしきあじかたち
遮断機の向こうも汗を拭いており
秋晴れやかからころとゆく利休下駄

佐藤雅子
森 懐人
斉田 仁
内藤隼人
鈴木真理子
工藤 掉
井口吾郎
井口 栗
濱野具円
小林苑を
今西是道
東 保
中村真一

さっちゃんね

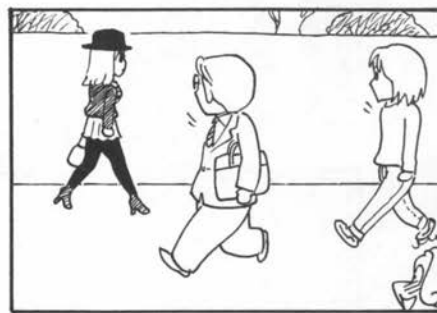
かまち♡ひろ



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



☆ハンギングバスケット



編集後記

月冴えて手元の月をひとつ飲み 岱潤

総本山知恩院で、元祖法然上人八百
大遠忌法要が十月二日から二十五日にお
いてつとめられた。私の寺でも檀信徒と
団参を行わせていただき、又私自身も法
要への随喜や和順会館での法話などをさ
せていただき、思い出に残る御遠忌とな
った。

又団参の諸堂拝観のときや、全くのフ
リで他教団の人をお連れしたときなど
に感じたことは、法話が決まった時、場
所だけではなく、焼香をする場や、境内
などで、天幕伝道と言って人が少しでも
集まっていれば、そこに布教師会の会員

が来て法話をするという、境内どこでも
お坊さんが話をしてくれることになつて
いることに、大変驚いてしまった。布教
師の方は大変だが、とてもいいことだと
感心した。よく学生さんが原稿を読みな
がらしている天幕伝道は目にするが、し
っかりした年齢の僧侶が近づいてきて気
さくに話をし、質問を受けてくれること
に、檀家の方や他教団の友人は、より親
しみと尊敬の念を強くしたようだ。荘嚴
な法要ももちろん大事だが、同様にあら
ゆる機会での法話は、こうした人が集ま
る法要の大事な要素だと実感した。
布教は話だけではないとよく言う。し
かし話ができないことには、布教の具体

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
舩 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

性が見えてこないのも実際だ。我が宗で
は「教師は全員布教師」と言われて久し
いが、説教は人任せの住職が多い。そし
て布教師の養成には時間がかかるのが現
実だ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三郵便物認可
印刷 平成二十三年十月二十日

発行 平成二十三年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四十七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(五七八)六九四七

FAX 〇三(五七八)六〇三六

振替 〇〇二八・八・八二八七

京都大本山清浄華院

このお寺は、清和天皇の勅願により貞観2年(860)、
慈覚大師じかくだいし円仁により創建され「清浄な華の台の如し」という意味から清浄華院じやうじやうけえんの名を賜りました。
法然上人のお念仏の教えは、道俗・貴賤を問わず
あらゆる人々から帰依されました。上人は、高倉
天皇・後白河法皇・後鳥羽天皇の三帝に授戒され

た功により、このお寺を賜われたのであります。
下図は清浄華院ではありませんが法然上人戒師に
よる帝への授戒の様子が描かれています。

国宝「法然上人行状絵図」より

総本山知恩院蔵



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう

600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版

1,600円(税別)

※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)500円(税別)